

# 炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

写真と文 池内文藏



## 第十一話 元服げんぷく

―姫、しっかり掴つかまって―濁流だくりゅうに飲まれまいと、木の根に掴まり、左手で桔梗ききょうの肩を抱いた。

ふたりの名を呼ぶ声が遠ざかる。既に多くの者が奔流ほんりゅうに攫さらわれた。倒壊した小屋が回転しながら流されて来る。

―あれに跳とび乗るんだ―桔梗の顔が恐怖で引き攣つる。小屋が目の前に迫った一瞬、左の腕かいなに有らん限りの力を込め、桔梗を屋根に押し上げた。そして自らも木の根に脚を掛け、跳躍ちようやくしようとして：滑すべった。濁流に飲まれながら桔梗の泣き声が遠ざかるのを感じた。その時、誰かに右腕を掴まれ、濁流から引き上げられた。記憶はそこまでだ。

眼めを開けると左近さこんが下船の準備をしており、雉丸きじまるも慌てて続いた。何か月かに一度みる「あの日」の夢。それを察してか左近は起こそうとしなかった。大和川と石川が交わる柏原かしわらの港には南都なんと方面から積荷を運んで来た石川源三郎らが左近ら恩智衆おんちしゅうを待っていた。合流して赤阪城に向かう。きょう、多聞丸が元服する。五年前の玉串川の水難で両親を亡くし、言葉を発する機能を失い、一緒にいた桔梗姫を行方不明にってしまった雉丸を救助した楠木正遠くすのきまさとおは、かれ

を責めることなく、傳役の恩智左近に預け、多聞丸のきょうだい分として育てた。観心寺で寄宿生活を送る多聞丸を度々訪ね、かれら楠木党の幹部候補らに下界の情報を絵で伝え、岩湧山の毛利時親の庵で「孫子」や「鬪戦経」を共に学び、馬の轡を取ろうとするかれをいつも引つ張り上げるなど、まさに「一心同体」だった。その多聞丸が元服する。雉丸のような下人には縁の無い儀式だったが、わがことのように誇らしく、昨夜は興奮のあまり眠れなかった。

赤阪の入口・森屋の辺りで前をゆく左近が下馬した。向こうから来た一団のなかから幼児を抱いた男が笑みを浮かべながら近付いて来る。かれは泉州の豪族和田正隆で、抱いているのは三年前に生まれた多聞丸の異母弟・海童丸(後の楠木正季)だ。幼児は談笑する正隆の腕の中でふてぶてしく雉丸を睨みつけている。もともとは紀州の和田川(和歌山市)流域の豪族だった和田氏は、鎌倉時代初期に泉州・美木多(南海泉北線の梶・美木多駅附近)に所領を得て、大阪湾に向かって領土を拡大し、岸という地に本拠を据えた。後にこの地は「岸和田」と呼ばれるようになる。城郭へと続く沿道を昨夜先乗りした水走党と神宮寺党が警備しており、昨夜痛飲したのであろう水走康政の例の「笑顔」が茹で蟹のように赤い。

元服の儀を前に、楠木氏の氏神である建水分神社で祈禱を受けていると、厠から出て来た水干姿の多聞丸が手招きする。

―きょうの主役がこんな所で―と半ば呆れながら近付くと、背後から大塚・橋本といった多聞丸の寄宿仲間らに羽交い絞めにされ、厩の中で雉丸も水干を着せられた。おそらく何らかの役割を与えられるのだろうと考えながら、多聞丸の後に付いて城門をくぐった。

加冠役を、鎌倉で旧友・長崎高綱によって帰還を先延ばしにされている正遠と、京で家人として仕える日野家の若君・資朝の歪んだ束縛で来られない異母兄・俊親の依頼で「軍学の師」である毛利時親が務め、理髪役を遠い昔に髪の手と別れた瀧覚が行う。六波羅探題の使いや撰河泉の豪族らが見守るなか、多聞丸の髪を結い上げた瀧覚が左近の背後で見守る雉丸に眼で―こっちに来い―と告げる。大塚に尻を叩かれ、恐る恐る多聞丸の背後に着座すると、背後に廻った瀧覚が雉丸の萎烏帽子を取り、目にも止まらぬ早業で髪を結い上げた。

唾然とする雉丸を後目に、瀧覚が理髪の完了を告げる。時親はひとつ咳払いした後、懐から

正遠より届いた文を読み上げた。

―多聞丸改め、橘朝臣・楠木多聞兵衛正成の名を与える―

多聞の名を残したのは、亡き妻・喜里への想いに違いなかった。文には続きがあり

―とも正どののむねん、成しとげよ―と記されていた。

瀧覚の胸に熱いものが込み上げて来た。とも正とは、自らが隠して生きて来た、そうとしか生きようの無かったわが名―和田小太郎朝正―。正遠は、教育係に招聘した名も無き僧の想いを我が子の名に込めてくれた。こんなに嬉しいことはない。

涙がこぼれない様に虚空をみつめる瀧覚の横顔を眺めながら、左近たちとかれを迎えに美濃の山奥を訪れた日を想い返していた雉丸に、時親が声を掛けた。

―雉丸改め、佐介。恩智左近の子となり、多聞兵衛をたすけよ―

「えっ…」一瞬、出ないはずの声を出した雉丸に驚いた多聞丸改め正成が振り返る。

祝宴が開かれた。正成の隣に、下人から「恩智家の後継者」となった雉丸改め佐介が座らされ、豪族らの挨拶を受けた。大人たちの挨拶の後、大塚や橋本らが祝意を述べ、最後に先日訪ねた南江の久子が、城内で迷子になったらしい海童丸の手を引いて祝いを述べた。

「おめでとうござります、たもんのあにうえ」

たどたどしく挨拶する海童丸の眼が赤い。迷子になって泣いていたらしい。つづいて佐介のまえに座りなおすと「さすけのあにうえ」と祝いの言葉を述べた。ふてぶてしく感じたのは人見知りのせいであろう。海童丸はやがて楠木党随一の猛将として佐介とともに正成を支えることになる。正成がこの一回り離れた異母弟の頭を撫でると、幼児は照れくさそうに久子を見つめ「おめでとう、ひさこのあねうえ」と笑った。「ありがとうだろ」と笑って小突く兄。やがて久子は、この海童丸の「あねうえ」となるのだが、それは十五年ほど先のはなしである。

この日を境に「あの日の夢」を見なくなった。代わりに心地よい桔梗の花園で昼寝する夢をみるようになった。遠くから「きじまる」と呼ぶ声がする。

かれはひとつ深呼吸してこう返す。

―姫、佐介に候―